

研 究

未就学児の親の育児関与とその規定因に関する研究

下坂 剛¹⁾, 姫田 知子²⁾

〔論文要旨〕

本研究の目的は、未就学児の年齢層による親の育児関与の因子構造の違いと、育児関与の父母間の差異、育児関与を規定する要因を検討することである。対象は、末子に0~2歳の子どもをもつ父親と母親各300人、末子に3~6歳の子どもをもつ父親と母親各300人の合計1,200人であった。調査は質問紙法によって行われ、対象者の居住地域に偏りがないう配慮し、親の育児関与、夫婦ペアレンティング、妻への(夫からの)サポートについてインターネット調査を実施した。分析の結果、0~2歳の子どもの親の育児関与は「身体的ケア」、「家事」、「心理的ケア」、「しつけ」の4因子と、3~6歳の子どもの親の育児関与は「心身のケア」、「家事」、「しつけ」、「遊び」の4因子が見出され、対象とした末子の年齢段階によって育児関与尺度の因子構造は異なっていた。父母間の比較では、すべての育児関与下位尺度得点で父親より母親の得点が高かった。育児関与の規定因は、父親は夫婦ペアレンティングや妻へのサポートの影響が大きかったが、母親は夫婦ペアレンティングや夫からのサポートに加え、健康面や家計収入などの人口統計学的変数も影響していた。本研究によって、母親よりも相対的に父親の育児関与が低いことが示され、父母ともに育児関与の規定因として夫婦関係が最も影響していることが示唆された。

Key words : 親の育児関与, 未就学児, 夫婦関係

I. 研究目的

近年、先進諸国を中心に女性の社会進出が望ましいものとされ、男性は仕事、女性は専業主婦といった伝統的性別役割分業観に基づく育児のあり方が変わりつつある。女性が男性と同等の仕事のキャリアを積むには、子育てにおける育児・家事分担は必須である。そうした文脈から、男性の育児参加を促進する必要性が高まってきたため、父親の育児関与 (father involvement) の研究が進められてきた。

海外では、Lamb¹⁾が父親の育児関与について、「相互作用」、「(子どもからの)近づきやすさ」、「責任」の3要素で捉えており、父親の育児関与を複数の側面を持った概念と定義している。日本では、大野²⁾が稼得や扶養は男性の役割とする男性性別役割規範の見直し

を伴うことを提言するなど、性別役割論の枠組みから捉える研究がいくつかみられる。また、父母双方の育児の違いを検討する研究も多く、父親は育児に肯定的な感情を抱きやすいが、母親は育児に肯定・否定双方の感情を抱くことや³⁾、父親になる意識が強い男性ほど夫婦関係満足度が高いといった知見⁴⁾がある。一方、夫婦の共同育児 (co-parenting) を重視する立場では、夫と妻は配偶者からの育児に関する役割期待を感じ取ることが重要とされる⁵⁾。子育てで母親が育児を自分だけが行うものとして囲い込んでしまうこと (gatekeeping) は、母親自身を精神的に追い込む弊害があるが、妻が夫の子育てを注意・批判するよりも、夫の子育ての良い面を褒め、尊重する方が夫の育児行動は増えやすい⁶⁾。また、男性は父親になって「社会にかかわる自分」の意識が強まるが、女性は母親になっ

A Study on Parental Involvement of Preschool Children and Its Determinants

[3231]

Tsuyoshi SHIMOSAKA, Tomoko HIMEDA

受付 20. 4. 13

1) 四国大学生生活科学部人間生活科学科 (研究職)

採用 21. 5. 7

2) 四国大学短期大学部幼児教育保育科 (研究職)

て「社会にかかわる自分」の意識が弱まり、「母親としての自分」の意識が強まるという知見もあり⁷⁾、父母双方の育児関与を、夫婦関係の双方向の視点から捉えることは重要である。本研究において育児関与を規定する要因を明らかにすることで、夫婦ともに積極的に育児関与するために何が必要かを探ることが可能になると考えられる。

しかし、日本では母親が育児の中心であることが前提とされ、母親の育児不安など、ほかの心理学的構成概念を用いた研究は多いが、母親の育児関与に注目した研究はほとんど行われていない一方で、欧米のように父親の育児関与を捉える尺度の研究もまた十分になされていない。現在のところ、父親の育児関与を捉える尺度を欧米の先行研究を踏まえて作成している研究は、下坂⁸⁾が欧米の研究を参考にしたもののみであり、3～6歳の未就学児の子育て期の父親の育児関与において「支持」、「交流」、「家事」、「しつけ」、「世話」の5側面を持つことを示している。ただし、この研究では3～6歳の子どもをもつ父親のみを対象としており、0～2歳の子どもをもつ父親の育児関与は内容的に異なる可能性があるが、今のところ明らかになっていない。また、欧米の父親の育児関与尺度に関する研究^{9,10)}では、母親の育児関与は父親よりも多いことを前提とし、父親の育児関与のみに限定しており、実際には比較検討はなされていない。さらに、育児関与と夫婦関係の関連性に関する知見の蓄積も不十分である。

そこで本研究では、未就学の子どもをもつ親の育児関与について、0～2歳までと3～6歳までの2つの時期における因子構造を検討したうえで、育児関与の下位尺度得点を用いて父母間の差異を検討し、さらにそれぞれの育児関与を規定する要因として、人口統計学的変数と夫婦関係の変数に注目し、その影響について明らかにすることを目的とする。親の育児関与と関連を検討する夫婦関係の要因としては、育児上の夫婦間協働を意味する夫婦ペアレンティングと、夫からの妻への育児サポートという重要な2側面を取り上げ、夫婦関係の様相と育児関与の関連性を検討する。

II. 方法

1. 研究対象者および調査方法

(株)アスマークのリサーチ専門データベースに登録されたモニター(2019年1月時点で全国87万人登録)

を、末子年齢2群(0～2歳, 3～6歳)×性別2群(父親, 母親)について、地域の偏りを防ぐために全国47都道府県すべてにはほぼ同程度の数で均等に割付け、得られた父親600人、母親600人の回答を分析の対象とした。なお、研究対象者の父親と母親はペアではない。調査は2019年3月から4月にかけて実施された。

2. 調査項目

1) フェイスシート

回答者の性別、年齢、最終学歴(中学、高校、短大・高専・専門学校、大学・大学院)、居住地(都道府県)、就業形態、1日の平均就労時間、家計収入(「100万円未満」～「1,300万円以上」の8段階)、現在の健康状態(「悪い」～「良い」の5段階)、子どもの人数、末子年齢、いずれかの親との同居状況、配偶者との1日あたりの会話時間(「ほとんどない」～「1日2時間以上」の5段階)を尋ねた。研究対象者の基本的属性を表1に示す。

2) 親の育児関与尺度

親の育児関与尺度の項目は、下坂⁸⁾が作成した69項目のうち、項目の削除および内容の修正を行い、最終的に61項目を親の育児関与に関する項目として使用した。教示文や評定法は下坂⁸⁾と同様で5件法である。

3) 夫婦ペアレンティング尺度

加藤ら⁶⁾による父親の子育て関与に対して母親が行う促進行動と抑制行動の働きかけを評定する、夫婦ペアレンティング調整尺度を用いた。夫から見て、妻から育児行動を促進・批判される働きかけがあったか回答する夫用と、妻が夫の育児行動を促進・批判する働きかけをしたか回答する妻用がある。「促進」9項目、「批判」8項目で合わせて17項目、6件法である。

4) 妻への(夫からの)サポート尺度

小林¹¹⁾が作成した項目を改変し、例えば、夫には“あなたは、妻が忙しいときに手伝うようにしている”、妻には“夫は、あなたが忙しいときに手伝ってくれる”などの、いずれも5項目を使用し、5件法で回答を求めた。

3. 倫理的配慮

研究の実施にあたり四国大学研究倫理審査委員会の審査を受け、承認を得た(承認番号:2019007)。調査は無記名方式であり、回答の中断が可能であった。調査画面の冒頭で、個人情報を守られることや、研究目

表1 対象者の概要

	父親（末子年齢0～2歳）	父親（末子年齢3～6歳）
年齢	22～62歳 ($M=37.65$, $SD=6.05$)	25～61歳 ($M=42.13$, $SD=5.76$)
最終学歴	中学校5 (1.7%), 高校45 (15.0%), 短大・専門学校49 (16.3%), 大学・大学院201 (67.0%)	中学校1 (0.3%), 高校46 (15.3%), 短大・専門学校42 (14.0%), 大学・大学院211 (70.3%)
就労形態	経営者・役員14 (4.7%), 常雇の一般従業員243 (81.0%), 派遣社員・契約社員7 (2.3%), パート・アルバイト4 (1.3%), 自営業主・自由業者22 (7.3%), 家族従業者2 (0.7%), 無職・専業主夫1 (0.3%), その他7 (2.3%)	経営者・役員16 (5.3%), 常雇の一般従業員250 (83.3%), 派遣社員・契約社員4 (1.3%), パート・アルバイト3 (1.0%), 自営業主・自由業者18 (6.0%), 家族従業者1 (0.3%), 無職・専業主夫2 (0.7%), その他6 (2.0%)
家計収入	100万円未満2 (0.7%), 100～200万円未満3 (1.0%), 200～400万円未満31 (10.3%), 400～600万円未満105 (35.0%), 600～800万円未満67 (22.3%), 800～1,000万円未満47 (15.7%), 1,000～1,300万円未満22 (7.3%), 1,300万円以上11 (3.7%), 無回答12 (4.0%)	100万円未満1 (0.3%), 100～200万円未満2 (0.7%), 200～400万円未満29 (9.7%), 400～600万円未満83 (27.7%), 600～800万円未満74 (24.7%), 800～1,000万円未満47 (15.7%), 1,000～1,300万円未満27 (9.0%), 1,300万円以上22 (7.3%), 無回答15 (5.0%)
子どもの数	1人85 (28.3%), 2人139 (46.3%), 3人64 (21.3%), 4人6 (2.0%), 5人3 (1.0%), 6人以上3 (0.9%)	1人93 (31.0%), 2人140 (46.7%), 3人52 (17.3%), 4人10 (3.3%), 5人4 (1.3%), 6人1 (0.3%)
末子年齢	0歳83 (27.7%), 1歳90 (30.0%), 2歳127 (42.3%)	3歳58 (19.3%), 4歳82 (27.3%), 5歳83 (27.7%), 6歳77 (25.7%)
家族形態	核家族275 (91.7%), 多世代同居家族25 (8.3%)	核家族273 (91.0%), 多世代同居家族27 (9.0%)
	母親（末子年齢0～2歳）	母親（末子年齢3～6歳）
年齢	19～47歳 ($M=33.46$, $SD=5.05$)	22～49歳 ($M=37.86$, $SD=4.70$)
最終学歴	中学校5 (1.7%), 高校65 (21.7%), 短大・専門学校100 (33.3%), 大学・大学院130 (43.3%)	中学校1 (0.3%), 高校72 (24.0%), 短大・専門学校104 (34.7%), 大学・大学院123 (41.0%)
就労形態	常雇の一般従業員69 (23.0%), 派遣社員・契約社員4 (1.3%), パート・アルバイト42 (14.0%), 自営業主・自由業者5 (1.7%), 家族従業者8 (2.7%), 無職・専業主婦169 (56.3%), その他3 (1.0%)	経営者・役員1 (0.3%), 常雇の一般従業員38 (12.7%), 派遣社員・契約社員13 (4.3%), パート・アルバイト73 (24.3%), 自営業主・自由業者6 (2.0%), 家族従業者4 (1.3%), 無職・専業主婦165 (55.0%)
家計収入	100万円未満1 (0.3%), 100～200万円未満5 (1.7%), 200～400万円未満46 (16.0%), 400～600万円未満92 (30.7%), 600～800万円未満69 (23.0%), 800～1,000万円未満39 (13.0%), 1,000～1,300万円未満18 (6.0%), 1,300万円以上4 (1.3%), 無回答24 (8.0%)	100万円未満4 (1.3%), 100～200万円未満4 (1.3%), 200～400万円未満30 (10.0%), 400～600万円未満92 (30.7%), 600～800万円未満74 (24.7%), 800～1,000万円未満44 (14.7%), 1,000～1,300万円未満16 (5.3%), 1,300万円以上7 (2.3%), 無回答29 (9.7%)
子どもの数	1人83 (27.7%), 2人126 (42.0%), 3人42 (14.0%), 4人8 (2.7%), 6人1 (0.3%)	1人111 (37.0%), 2人137 (45.7%), 3人43 (14.3%), 4人5 (1.7%), 5人4 (1.3%)
末子年齢	0歳83 (27.7%), 1歳126 (42.0%), 2歳91 (30.3%)	3歳74 (24.7%), 4歳77 (25.7%), 5歳71 (23.7%), 6歳78 (26.0%)
家族形態	核家族272 (90.7%), 多世代同居家族28 (9.3%)	核家族285 (95.0%), 多世代同居家族15 (5.0%)

すべての回答者は配偶者と同居している。

的以外にデータを使用しないこと、データに含まれる個人情報外部に漏洩することがないように細心の注意を払うことを伝え、同意した者のみ回答した。なお、分析にはHAD ver.16¹²⁾を用いた。

Ⅲ. 結 果

1. 親の育児関与尺度の因子分析

親の育児関与尺度について、まず「あてはまらない状況」と回答した欠損値の割合を検討し、末子年齢0～2歳児の親（以下、0-2）の育児関与項目は17項

目を削除して44項目、末子年齢3～6歳児の親（以下、3-6）の育児関与項目は10項目を削除して51項目を以下の分析に用いた。0-2および3-6のそれぞれについて天井効果およびフロア効果を検討したところ、選択肢の上限値または下限値に回答者の9割以上が回答していた項目はみられなかったため、以後の分析にすべての項目を用いることにした。

0-2および3-6のそれぞれについて最尤法による因子分析を行った。山際・田中¹³⁾にしたがって、固有値の減衰状況（0～2歳においては23.67, 2.84, 1.70,

表2 最年少児が0～2歳の親の育児関与尺度の因子分析（最尤法，プロマックス回転後）

項目	F1	F2	F3	F4	共通性	M	SD
身体的ケア ($\alpha = .97$)							
子どもを夜寝かしつける	.72	.22	0.00	-.07	.74	3.88	1.25
子どもの入浴の世話をする	.71	.01	.06	.06	.64	4.09	1.07
夜中に子どもが泣いたら、起きて子どものところに行く	.69	.20	.05	-.03	.76	3.90	1.23
子どもの洗顔や洗髪の手伝いをする	.69	-.01	.12	.04	.64	3.99	1.13
子どものおむつ交換をする	.64	.28	-.01	.05	.82	4.05	1.11
子どもに服を着せる	.62	.13	.14	-.01	.67	3.97	1.09
子どもの排泄（はいせつ）の世話をする	.61	.23	.11	-.04	.76	3.96	1.13
必要なとき子どもの病院の予約を入れる	.59	.34	-.06	.04	.74	3.80	1.39
子どもに、朝の支度（朝食をとる、服を着るなど）をさせる	.58	.35	.00	-.01	.76	3.88	1.24
子どもが病気のとき、病院に連れて行き、受診させる	.51	.39	.05	.01	.78	3.95	1.23
子どもが病気のときは看病する	.44	.05	.38	.09	.75	4.11	1.02
家事 ($\alpha = .94$)							
洗濯物をたたむ	-.02	.90	-.07	.08	.79	3.83	1.29
家の掃除（掃く、掃除機をかけるなど）をする	-.04	.88	.00	.04	.77	3.84	1.17
トイレの掃除をする	-.04	.85	.01	-.01	.66	3.65	1.34
食材の買い物に行く	-.07	.80	.05	.11	.73	3.91	1.19
洗濯をする	.17	.77	-.09	.06	.78	3.95	1.29
食事を用意する	.30	.73	-.08	-.02	.84	3.75	1.38
子どものおやつを作る	-.03	.68	.12	-.28	.36	2.88	1.39
食事の後片付けをする	.29	.61	.01	.03	.78	4.01	1.19
生活費を管理する	.01	.57	.04	.10	.44	3.83	1.36
お風呂掃除をする	-.23	.57	.31	-.03	.36	3.86	1.17
心理的ケア ($\alpha = .93$)							
子どもに、とても大切に思っていることを伝える	-.11	.13	.84	-.04	.66	4.01	1.01
子どもが不安がっているとき安心させる	.04	.08	.80	-.10	.67	3.88	1.01
家が子どもにとって安全な場所であるよう努める	-.07	.10	.79	.06	.72	4.10	0.92
子どもが泣いているとき慰める	.16	-.04	.78	-.07	.69	3.93	0.96
子どもが外で遊んでいるときは目を離さない	-.05	.00	.76	.11	.64	4.05	0.96
子どもたちに愛情表現（触れる、抱っこ、キス）をする	.10	.00	.74	-.02	.65	4.18	0.95
子どもが怪我をしたらすぐに手当する	.25	-.10	.70	-.01	.69	3.97	1.02
子どもが何かを成し遂げたときは褒める	.17	-.04	.60	.17	.70	4.14	0.97
子どもがしたいことで一緒に時間を過ごす	.00	-.01	.57	.01	.32	3.64	0.89
子どものテレビ番組と一緒に見る	-.05	.01	.41	.15	.24	3.58	0.97
しつけ ($\alpha = .92$)							
子どもが悪いことをしたら叱る	.11	-.10	.01	.89	.83	4.16	0.94
子どもが言うことを聞かなかったら叱る	.04	-.04	-.11	.89	.68	3.93	0.98
子どもが大騒ぎをしたら注意する	-.09	.05	.04	.88	.77	3.99	0.99
子どもにしてはいけないことのルールを教える	-.02	-.06	.23	.75	.75	4.06	0.92
子どもに食事のマナーを教える	-.03	.16	.12	.55	.53	3.66	1.02
因子間相関		F2	F3	F4			
F1		.78	.72	.62			
F2			.61	.57			
F3				.66			

Mは各項目の平均値, SDは標準偏差。

1.57, 1.20, 1.01, 0.88..., 3～6歳においては22.93, 4.52, 2.99, 2.16, 1.40, 1.10, 1.00, 0.84...)と因子の解釈可能性を踏まえて、0-2, 3-6ともに6因子を仮定した。そのうえで、最尤法、プロマックス回転による因子分析を行い、当該因子のみに因子負荷

量.40以上でほかの因子に.40以下であること、因子を構成する項目が3項目以上あることを基準にそれぞれ因子数を減らして分析を行った結果、0-2で8項目を削除し、3-6からも8項目を削除していずれも4因子構造が得られた。

表3 最年少児が3～6歳の親の育児関与尺度の因子分析（最尤法、プロマックス回転後）

項目	F1	F2	F3	F4	共通性	M	SD
心身のケア ($\alpha = .96$)							
子どもが何かを成し遂げたときは褒める	.90	-.07	.03	-.14	.68	4.19	0.90
子どもが泣いているとき慰める	.88	-.05	-.08	.06	.70	3.85	0.95
子どもが不安がっているとき安心させる	.88	-.06	-.02	.08	.76	3.91	0.98
子どもが悩んでいたたり辛そうなそぶりをみせるときは寄り添う	.86	-.01	-.06	.10	.77	3.91	0.92
子どもたちに愛情表現（触れる、抱っこ、キス）をする	.84	.03	-.07	-.04	.62	4.08	0.95
子どもが混乱状態にあるときは丁寧に関わって落ちつかせ、何が問題なのか話をきく	.84	.08	-.05	.03	.76	3.95	0.93
家が子どもにとって安全な場所であるよう努める	.81	.00	.07	-.04	.69	4.09	0.89
子どもが困難なことを成し遂げるよう励ます	.80	-.10	.05	.13	.71	3.88	0.89
子どもが怪我をしたらすぐに手当する	.68	.15	.07	-.06	.65	4.06	0.95
子どもが外で遊んでいるときは目を離さない	.67	-.03	.03	.12	.56	3.91	0.94
子どもに、とても大切に思っていることを伝える	.66	.03	.02	.16	.63	3.85	1.00
子どもが病気のときは看病する	.56	.36	.09	-.14	.70	4.15	0.98
子どもたちが参加する行事（運動会、イベントなど）に行く	.55	.23	.01	-.01	.50	4.02	1.01
家事 ($\alpha = .96$)							
洗濯をする	-.03	.95	-.02	-.10	.80	3.94	1.33
食事を用意する	-.11	.94	.00	.07	.81	3.81	1.38
洗濯物をたたむ	-.03	.93	-.01	-.10	.78	3.84	1.31
トイレの掃除をする	-.06	.92	-.06	.02	.75	3.68	1.34
家の掃除（掃く、掃除機をかけるなど）をする	-.02	.90	-.06	.01	.73	3.84	1.21
食材の買い物に行く	.01	.86	.04	-.04	.77	3.92	1.23
食事の後片付けをする	.01	.83	.06	-.02	.75	3.96	1.23
必要なとき子どもの病院の予約を入れる	-.04	.79	.09	.02	.67	3.83	1.31
子どもが病気のとき、病院に連れて行き、受診させる	.12	.73	.06	-.02	.71	3.98	1.16
生活費を管理する	.01	.68	.03	-.04	.48	3.82	1.38
子どもに、朝の支度（朝食をとる、服を着るなど）をさせる	.03	.67	.00	.14	.55	3.68	1.24
子どもの耳掃除をする	-.08	.58	-.03	.26	.41	3.15	1.47
お風呂掃除をする	.13	.56	-.04	.05	.42	3.83	1.24
子どもを夜寝かしつける	.20	.47	-.10	.16	.40	3.50	1.24
子どもに食事をさせる	.37	.43	.15	-.12	.61	4.32	0.95
しつけ ($\alpha = .90$)							
子どもが言うことを聞かなかったら叱る	-.06	.02	.89	-.05	.72	4.04	0.91
子どもが悪いことをしたら叱る	.17	-.07	.83	-.10	.78	4.30	0.84
子どもが大騒ぎをしたら注意する	.07	.05	.82	-.08	.74	4.18	0.87
子どもにおもちゃの後片付けをさせる	-.07	.02	.73	.10	.54	3.88	0.97
子どもにしてはいけないことのルールを教える	.26	-.05	.72	-.04	.76	4.19	0.84
子どもに食事のマナーを教える	.01	.07	.56	.18	.48	3.67	0.97
子どもがテレビを見たりゲームをしていい時間を決める	-.20	.03	.50	.31	.30	3.53	1.09
遊び ($\alpha = .88$)							
子どもの教育によりゲームやおもちゃを家に持って帰る	-.12	-.01	.05	.78	.54	2.87	1.04
子どもをピクニックに連れて行く	-.07	.07	-.08	.75	.51	2.84	1.09
子どもにさまざまな運動に触れさせる	-.03	-.03	.13	.72	.55	3.19	1.01
子どもを公園に連れて行く	.06	-.03	.03	.63	.45	3.36	1.02
子どもが好きな音楽と一緒に聴く	.12	.00	.02	.62	.50	3.22	1.09
子どもに本の読み聞かせをする	.06	.11	-.12	.59	.39	2.98	1.17
子どもがしたいことで一緒に時間を過ごす	.25	-.03	.06	.57	.57	3.52	0.93
子どものテレビ番組と一緒に見る	.20	-.03	.03	.52	.42	3.38	1.05
因子間相関							
F1		.61	.69	.54			
F2			.55	.32			
F3				.35			

Mは各項目の平均値、SDは標準偏差。

0-2では、第1因子は、日常生活や病気の際などに子どもの清潔を保つ身体面の世話をを行う育児関与を表しているので「身体的ケア」因子と命名した。第2因子は、日常生活における育児関与を支える家事全般を表しているので「家事」因子と命名した。第3因子は、子どもが泣いているときに慰めたり、外遊びなどで目を離さないように気を配る育児関与を表しているので「心理的ケア」因子と命名した。第4因子は、子どもの食事の仕方などのマナーや問題行動に注意する育児関与を表しているので「しつけ」因子と命名した。

3-6では、第1因子は、子どもが精神的に不安な様子を見せるときに寄り添ったり、病気の際の看病といった育児関与を表しているので「心身のケア」因子と命名した。第2因子は、0-2と同じく育児関与の基礎となる家事全般を表しているので「家事」因子と命名した。第3因子は、0-2とほぼ同様に食事のマナー、テレビやゲームの時間などのルールと問題行動への注意に関する育児関与を表しているので「しつけ」因子と命名した。第4因子は、屋内や外出先で子どもと遊びをとおして関わる育児関与を表しているので「遊び」因子と命名した。

表2と表3には、0-2と3-6ごとの各項目の平均値と標準偏差を示している。また、因子間相関は0-2で $r = .57-.78$ と中程度から強い正の相関、3-6で $r = .32-.69$ と弱い相関から中程度の正の相関が相互にみられた。

2. 親の育児関与の父母間の差異

親の育児関与尺度の0-2および3-6それぞれの下位尺度得点について、父母による差異をt検定によって分析した。0-2では表4に示すとおり、「身体的ケア」($t(413) = 21.35, p < .001, d = 2.01$: d はCohen's d の効果を表す)、「家事」($t(411) = 22.15, p < .001, d = 2.08$)、「心理的ケア」($t(421) = 11.10, p < .001, d = 1.04$)、「しつけ」($t(440) = 10.54, p < .001, d = 1.00$)とすべての下位尺度で父親より母親の方が有意に高く、効果量 d はCohen¹⁴⁾の基準によればすべて0.8以上の大きな効果量を示した。また3-6でも表5に示すとおり、「心身のケア」($t(429) = 9.64, p < .001, d = 0.91$)、「家事」($t(408) = 24.71, p < .001, d = 2.31$)、「しつけ」($t(408) = 8.61, p < .001, d = 0.80$)、「遊び」($t(440) = 2.36, p < .05, d = 0.22$)とすべての下位尺度で父親より母親の方が

表4 0-2歳の父母間の育児関与下位尺度得点の比較

育児関与		父親	母親	t値	d
身体的ケア	平均	3.23	4.64	21.35***	2.01
	(SD)	(0.80)	(0.58)		
家事	平均	3.05	4.49	22.15***	2.08
	(SD)	(0.80)	(0.57)		
心理的ケア	平均	3.53	4.23	11.10***	1.04
	(SD)	(0.76)	(0.57)		
しつけ	平均	3.58	4.33	10.54***	1.00
	(SD)	(0.80)	(0.71)		

d はCohen's d , *** $p < .001$

表5 3-6歳の父母間の育児関与下位尺度得点の比較

育児関与		父親	母親	t値	d
心身のケア	平均	3.62	4.26	9.64***	0.91
	(SD)	(0.79)	(0.61)		
家事	平均	3.01	4.54	24.71***	2.31
	(SD)	(0.77)	(0.52)		
しつけ	平均	3.67	4.23	8.61***	0.80
	(SD)	(0.80)	(0.54)		
遊び	平均	3.12	3.29	2.36*	0.22
	(SD)	(0.78)	(0.74)		

d はCohen's d , * $p < .05$, *** $p < .001$

有意に高かったが、効果量 d はCohenの基準によれば「遊び」のみ0.2以上の小さな効果量であり、ほかの3つの下位尺度は0.8以上の大きな効果量であった。

3. 育児関与を規定する要因の検討

0-2と3-6の父親および母親の育児関与下位尺度得点を基準変数として、重回帰分析(強制投入法)を行った。説明変数には年齢、学歴、家計収入、健康状態、子どもの人数、最年少児の年齢、配偶者との1日あたりの会話時間、夫婦ペアレンティングの2下位尺度、妻への(夫からの)サポート尺度を投入した(表6)。なお、いずれの分析においてもVIF(Variance Inflation Factor)が10を超えておらず、多重共線性の問題はないと判断される。

0-2の父親で育児関与に影響を及ぼしていたのは、「身体的ケア」で子どもの人数、配偶者との会話、妻からの促進と批判、妻へのサポート、「家事」で妻からの促進と批判、「心理的ケア」で妻からの批判と妻へのサポート、「しつけ」で子どもの人数と妻へのサポートであった。0-2の母親で育児関与に影響を及ぼしていたのは、「身体的ケア」で年齢、学歴、家計

表6 育児関与を従属変数とする重回帰分析(強制投入法)

	0～2歳父親				3～6歳父親			
	身体的ケア	家事	心理的ケア	しつけ	心身のケア	家事	しつけ	遊び
年齢	-.075	-.034	-.009	.031	-.078	-.071	-.081	-.109
学歴	-.019	-.057	-.026	.021	-.084	-.003	-.003	-.047
家計収入	.009	.103	.068	.029	-.004	.117	.048	.028
健康状態	-.058	-.042	.054	.087	.134 *	.083	.013	.103
子どもの人数	.166 **	.060	-.023	.173 **	-.001	.028	.123 *	.009
最年少児の年齢	-.070	-.066	.006	-.026	-.003	.023	.060	-.011
配偶者との会話	.163 **	-.009	.086	.099	.021	-.010	.072	.014
妻からの促進	.178 *	.234 **	.120	.017	.160 *	.261 **	.167 *	.267 **
妻からの批判	.181 **	.156 **	.117 *	.006	.120 *	.218 **	.052	.205 **
妻へのサポート	.172 *	.100	.416 **	.333 **	.405 **	.175 **	.270 **	.168 *
R ²	.238 **	.134 **	.308 **	.214 **	.321 **	.222 **	.204 **	.230 **

	0～2歳母親				3～6歳母親			
	身体的ケア	家事	心理的ケア	しつけ	心身のケア	家事	しつけ	遊び
年齢	.141 *	.179 **	.138 *	.033	.069	.049	-.031	-.064
学歴	-.147 *	-.060	-.109	-.036	-.066	-.003	.013	-.013
家計収入	-.153 *	-.184 **	-.073	-.124 *	-.054	.117	-.030	-.014
健康状態	.137 *	.103	.115	.051	.185 **	.098	.013	.028
子どもの人数	-.026	.047	-.127 *	.266 **	-.030	.028	.120	-.080
最年少児の年齢	.058	.074	.037	.083	-.134 *	.023	-.064	-.033
配偶者との会話	.040	-.005	.079	.064	-.029	-.010	.014	-.005
夫への促進	.229 **	.281 **	.465 **	.359 **	.191 *	.261 **	-.027	.326 **
夫への批判	.020	.077	-.022	.133 *	-.035	.218 **	.028	.061
夫からのサポート	.012	-.013	-.185 *	-.093	-.195 *	.175 **	.031	-.103
R ²	.143 **	.164 **	.229 **	.220 **	.084 *	.222 **	.030	.096 *

値は標準偏回帰係数, ** $p < .01$, * $p < .05$

収入, 健康状態, 夫への促進, 「家事」で年齢, 家計収入, 夫への促進, 「心理的ケア」で年齢, 子どもの人数, 夫への促進, 夫からのサポート, 「しつけ」で家計収入, 子どもの人数, 夫への促進と批判であった。

3-6の父親で育児関与に影響を及ぼしていたのは, 「心身のケア」で健康状態, 妻からの促進と批判, 妻へのサポート, 「家事」で妻からの促進と批判, 妻へのサポート, 「しつけ」で子どもの人数, 妻からの促進, 妻へのサポート, 「遊び」で妻からの促進と批判, 妻へのサポートであった。3-6の母親で育児関与に影響を及ぼしていたのは, 「心身のケア」で健康状態, 最年少児の年齢, 夫への促進, 夫からのサポート, 「家事」で夫への促進と批判, 夫からのサポート, 「しつけ」では有意な変数がなく, 「遊び」では夫への促進であった。

なお効果量は, 水本ら¹⁵⁾の基準によれば, 0-2の父親の「心理的ケア」と3-6の父親の「心身のケア」では大きな値($R^2 > .26$)を示した。また, 表6の右

下部分に示すように, 有意でなかった3-6の母親の「しつけ」と, 小さな効果量($R^2 > .02$)であった3-6の母親の「心身のケア」と「遊び」以外は, おおむね中程度の効果量($R^2 > .13$)であった。

IV. 考 察

本研究では, 0-2と3-6の父母それぞれの育児関与の構造や量的差異を検討したうえで, 育児関与のそれぞれの内容がどのような変数によって規定されるかを検討した。以下, 主な点について考察する。

1. 親の育児関与尺度と父母間の差異

0-2および3-6における父母の育児関与の因子分析の結果から, 相互に共通した内容は含みつつも, 子どもの発達段階に応じて内容的には異なった育児関与の構造が示された。具体的には, 0-2は「身体的ケア」と「心理的ケア」が独立した因子であったのに対して, 3-6では「心身のケア」と因子が一つにまとまっ

た代わりに、新たに「遊び」因子が見出された。その理由として、2歳までの子どもと比較して3歳以上の子どもになると、親子間で相互的なやりとりが成立し、言語を介した遊びも活発化することが考えられよう。一方で、「しつけ」や「家事」が0-2と3-6で共通した因子として見出されたのは、この2因子が子どもの年齢にかかわらず、未就学児における育児関与においては重要な要素であることを示唆している。そして、0-2および3-6のすべての下位尺度において、母親が父親より育児関与をより多く行っており、両者での偏りが顕著であることが効果量の大きさからも明らかであった。母親がつけた日常生活記録から、遊び仲間としての父親の役割は、生後15~30か月にかけての時期に増大するという指摘¹⁶⁾もある。こうした2歳頃を区切りとした親子間相互作用が、本研究において因子構造の違いとして示されたといえる。

2. 親の育児関与を規定する要因

0-2および3-6の父母それぞれの育児関与について、人口統計学的変数や夫婦関係に関する変数による影響を検討したが、その結果からいえることは、まず第一に父母ともに夫婦関係が育児関与に強く影響していることであった。相対的に少ない父親の育児関与を中心に見ていくと、父親における育児関与は年齢や学歴といった人口統計学的変数はほとんど影響しておらず、夫婦ペアレンティングにおいて妻からどの程度促進され、批判されるか、つまり育児を行う際に妻から褒められたり、ときに厳しく指示されることにより、夫が育児関与を増加させる傾向が明らかである。この結果は加藤ら⁶⁾の夫婦ペアレンティングと単一因子の父親の育児関与との相関分析で、父親において「促進」は弱い正の相関、「批判」はほぼ無相関であった結果と一致する。

また、最も大きな要因と考えられるのは、父親が妻へのサポート感を持っていることであった。0-2の「心理的ケア」と3-6の「心身のケア」では、妻へのサポート感尺度がいずれも中程度以上の標準偏回帰係数を示していることから、妻へのサポートを心がけることができる父親は、子どもへの心理的サポートも積極的に行えることがうかがえる。森・橋本¹⁷⁾の研究では、父親のコミュニケーション態度が高い群は、子どもの社会的スキルを高く、問題行動を低く評定していた。父親自身のコミュニケーション能力の高さは、妻

や子どもとのコミュニケーションと相互に影響を及ぼし合っているという推測は可能である。

小林¹¹⁾は、母親のデータで夫からのサポートそのものは抑うつ傾向と関連はなかったが、コントロール可能性を介したパスでは夫からのサポートが抑うつを低める影響を見出しており、妻の負担感に配慮し、必要に応じてサポートする父親のあり方が、育児関与の促進要因となっていることを示している。本研究の結果でも、母親では、特に産後間もない0-2において年齢、家計収入、子どもの人数、3-6において健康状態が、それぞれ父親の育児関与を阻害する可能性があることを示唆しているため、これらのリスク要因について妻の負担感が高い場合には父親のサポートが重要となると考えられる。日本の親研究は、父親の育児関与が母親の精神的健康や子どもの発達に対して良い影響があることを繰り返し報告してきたが、母親が家庭の仕事のマネージャーとなって父親の育児関与に采配をふるい、家庭役割における責任を維持しようとするゲートキーピングと呼ばれる行動によって、父親の育児関与を封じてしまう可能性についてはあまり考えてこなかった¹⁸⁾。つまり母親自身が無理をしすぎて、健康面を損なうほど育児負担を背負い込まないように予防していく観点も必要ということである。このことから、少なくとも女性が男性より育児関与を負担せざるを得ない要因として以下の二点が考えられる。第一に、母親は大きな身体的ストレスがかかるため妊娠中から出産を経て、子どもと一緒に過ごす時間が父親よりも長くなる可能性が高く、それに伴って育児を過剰に自らの責任として捉えてしまうリスクがある。第二に、母親が社会における仕事上のキャリアを積むことにハンディキャップがある点であり、例えば、母親は出産後に産休を1年ほどとることが多いが、仮に1年未満で早めに職場復帰したとしても、保育施設に子どもを預ける際に母子分離不安を経験するなど、自らの仕事上のキャリアと子どもの世話のどちらかを優先するかで葛藤することもある。また、専業主婦の場合も仮にパートなどで就労を希望しても、保育施設の確保の困難さや子どもの世話を優先したいという思いから、少し子どもの世話が軽減する幼児期後期などにずれ込むケースもある。こうした母親がつい育児を自らの責任と過剰に思い込み、育児をするうえで抱えやすい心理的葛藤を緩和するためには、父親による育児関与と協力が必要である。

本研究の課題としては以下の三点がある。第一の課題は、本研究の対象者はペアデータではないため、父母間の比較は厳密に言えば、実際の夫婦における違いを反映していない可能性がある。今後ペアデータによる分析で、特に父母間の育児関与の差異得点を規定する要因を検討することは、有効な知見を提供すると思われる。第二の課題は、育児関与は子どもの発達に伴ってどのように変化するのかという点について、本研究では質的に異なることは示されたものの、量的な違いは検討できなかった。今回は0-2と3-6における育児関与の違いを詳細に検討するために異なる因子構造を見出したが、両者に共通した因子構造を持つ尺度の作成も可能であろう。また、本研究では未就学児をもつ親に限定したが、小学校以降、特に思春期を含め、新たな親の育児関与を測定する尺度の開発が望まれる。最後に第三の課題は、育児関与に対して夫婦関係が影響することは示されたものの、時系列を想定した場合、夫婦関係がそれぞれの育児関与に影響し、そこからまた夫婦関係にも影響を及ぼすといった相互依存性モデル¹⁹⁾が考えられる。

V. 結 論

本研究では、親の育児関与が最年少児の年齢によって質的に異なることや、父母間の育児関与に量的な差異が明確であること、育児関与の規定因として夫婦関係が占める割合がかなり高いことが示唆された。本研究の目的である親の関与尺度の因子構造の検討については、0-2と3-6でそれぞれ解釈可能な4因子構造が見出され、信頼性と妥当性が確認された。各下位尺度間の父母間の差異はすべて母親の方が高く、育児関与が父親より母親に偏っていることがはっきり示された。親の育児関与の要因として取り上げた、夫婦ペアレンティングや夫からのサポートは十分に関連性が認められた。今後は、育児関与の父母間の偏りを踏まえ、どのような夫婦間の子育て支援のあり方が望ましいか実践的知見の蓄積が望まれる。

本研究は、科学研究費補助金基盤研究C(課題番号18K02513)の補助を受けた。また、本研究の一部は日本心理学会第83回大会(2019年9月)で発表した。

利益相反に関する開示事項はありません。

文 献

- 1) Lamb ME, ed. The father's role : applied perspective. New York : John Wiley & Sons, 1986.
- 2) 大野祥子. 育児期男性にとっての家庭関与の意味 : 男性の生活スタイルの多様化に注目して. 発達心理学研究 2012 ; 23 : 287-297.
- 3) 柏木恵子, 若松素子. 「親となる」ことによる人格発達 : 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究 1994 ; 5 : 72-83.
- 4) 森下葉子. 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究 2006 ; 17 : 182-192.
- 5) 青木聡子. 幼児をもつ共働き夫婦の育児における協同とそれにかかわる要因 : 育児の計画における連携・調整と育児行動の分担に着目して. 発達心理学研究 2009 ; 20 : 382-392.
- 6) 加藤道代, 黒澤 泰, 神谷哲司. 夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討. 心理学研究 2014 ; 84 : 566-575.
- 7) 小野寺敦子. 親になることによる自己概念の変化. 発達心理学研究 2003 ; 14 : 180-190.
- 8) 下坂 剛. 父親の育児関与尺度の開発および信頼性と妥当性について. 小児保健研究 2019 ; 78 : 289-295.
- 9) Hawkins J, Bradford KP, Palkovitz R, et al. The inventory of father involvement : a pilot study if a new measure of father involvement. The Journal of Men's Studies 2002 ; 10 : 183-196.
- 10) Dubeau D, Devault A, Paquette D. Father involvement : a multifaced concept. Devault A, Forget G, Dubeau D, eds. Fathering : promoting positive father involvement. Toronto : University of Toronto Press, 2015 : 47-70.
- 11) 小林佐知子. 乳児をもつ母親の抑うつ傾向と夫からのサポートおよびストレスへのコントロール可能性との関連. 発達心理学研究 2009 ; 20 : 189-197.
- 12) 清水裕士. フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案. メディア・情報・コミュニケーション研究 2016 ; 1 : 59-73.
- 13) 山際勇一郎, 田中 敏. ユーザーのための心理データの多変量解析法—方法の理解から論文の書き方まで—. 東京 : 教育出版, 1997.
- 14) Cohen J. Statistical power analysis for the

behavioral sciences (2nd ed.). NJ : Lawrence Erlbaum Associates, 1969.

- 15) 水本 篤, 竹内 理. 研究論文における効果量の報告のために—基礎的概念と注意点—. 英語教育研究 2008 ; 31 : 57-66.
- 16) Clarke-Stewart KA. 幼児初期における子どもの認知の発達および社会性の発達に対する父親の貢献. 依田 明監訳, 齋藤浩子訳. 父子関係の心理学. 東京 : 新曜社, 1986 : 127-164, Pedersen FA, Ed. The father-infant relationship. NY : Prager Publishing, 1980.
- 17) 森 友里奈, 橋本紀子. 子育てをめぐる夫婦間のコミュニケーションのあり方と子どもの社会性の発達との関連. 女子栄養大学紀要 2012 ; 43 : 41-51.
- 18) 加藤道代, 黒澤 泰, 神谷哲司. 母親の gatekeeping に関する研究動向と課題—夫婦ペアレンティングの理解のために—. 東北大学大学院教育学研究科研究年報 2012 ; 61 : 109-126.
- 19) 浅野良輔. ペアデータによる2者関係の相互依存性へのアプローチ. 実験社会心理学研究 2017 ; 56 : 139-141.

[Summary]

The study aimed to examine the differences in the factor structure of parental involvement in childcare according to the age groups of preschool children, differences between mothers and fathers in parental involvement, and factors that govern parental

involvement. The participants included 300 fathers and 300 mothers whose youngest child was aged two years or younger and 300 fathers and 300 mothers whose youngest child was between the three and six years old. An online survey was conducted on parental involvement in parenting, marital parenting, and husbands' support for wives. The study practiced caution to avoid distribution bias in residential areas of the participants. The results of the factor analysis revealed four factors of parental involvement for children aged two or younger, namely, physical care, housework, psychological care, and discipline. Another four factors emerged for parental involvement for children aged three to six years, namely, mental and physical care, housework, discipline, and play. Furthermore, the findings revealed that mothers scored higher than fathers on all subscales of parental involvement, mainly attributed to father-to-wife parenting and support for wives. Marital parenting, support from husbands, and demographic factors such as health and household income influenced mothers. Moreover, the results revealed that fathers' level of involvement in parenting was relatively lower than that of mothers. Thus, marital relationships were most likely to strongly influence the parenting of both parents.

[Key words]

parental involvement, preschooler, marital relationship